ランチタイムミーティング参加記

登壇者：　山形　眞理子先生

2025 年 1 月 16 日（木）に開催された人文研究センターランチタイムミーティングでは、東南アジア考古学がご専門の山形眞理子先生をお招きした。ご発表では、山形先生とベトナム考古学との出会いをはじめ、調査研究にあたってのご苦労や思い出、研究上の大きな発見などについてお話しいただき、参加者はベトナム考古学のロマンと興奮に包まれたひと時を味わった。

山形先生はもともと縄文時代の土器を対象にご研究をされていたが、1990 年代からベトナムでの調査を開始し、その後 30 年以上にもわたってベトナム考古学に携わってこられた。2023 年の日越外交関係樹立 50 周年の際には、チャーキュウ遺跡で調査をはじめて 30 周年だったこともあり、山形先生は現地メディアにも取り上げられ、遺跡のあるクアンナム省からも表彰されたのだとか！

ご発表では、扶南のオケオ文化・遺跡、林邑のチャンパ王国、トゥーボン川に沿って分布するサーフィン文化、チャーキュウ遺跡、ゴーカム遺跡など、さまざまな遺跡から人々の暮らしの痕跡をご紹介いただいた。サーフィン文化の甕棺墓地、そこから発掘された独特な耳飾りとビーズ、ビンイェン遺跡から出土した前漢時代の「日光鏡」、ゴーカム遺跡から出土した数々の漢系の遺物からは、その時代の交易文化、つまり地域を超えた人々の交流の歴史をうかがい知ることができる。ベトナムの遺跡群が物語るのは、中国やインド、ひいてはローマといった、陸路・海路さまざまなルートからやってきた文化や文明の歴史である。それこそが、ベトナム考古学の魅力であると山形先生はおっしゃった。

個人的に惹かれたのは、様々な人面紋瓦当、つまり人の顔の姿をした瓦である。人面紋瓦当は、宗教施設や行政施設、城などの屋根を飾った。岡本太郎の太陽の塔を彷彿とさせる顔、柔和な笑顔、目の吊り上がった表情、少し間の抜けたような表情…じつにさまざまでユニークな人面紋瓦当がチャーキュウ遺跡から発見された。これらはどこからやってきたのだろうか。その答えの一つを示したのは、南京市内で出土した人面紋瓦当であった。確かに、お見せいただいた写真の表情は、チャーキュウ遺跡のそれとよく似ていた。3 世紀、林邑は呉の瓦当文様を採用したと思われ、このことから、林邑が「インド化」する前に強い漢系文化の影響を受けていたことを山形先生は指摘した。

発表後の質疑応答はさまざまな専門分野の教員により活発に行われたが、やはりその質問は人面紋瓦当に集中した。山形先生によれば、表情にもいくつかのパターンや分布の傾向があり、ローカライズしているものもあるという。地域を超えて、さまざまな表情をした瓦に、その昔、人々は何を見出し、望み、語ったのか。海や陸を旅しながら表情を変えてゆく人面紋瓦当は、人類のどのような悲哀、喜び、祈りを見てきたのだろうか。ベトナム考古学のロマンは、尽きることがない。

橋本　栄莉（文学部史学科）